

重陽と敬老

旧暦九月九日の重陽節は中国で重要な伝統的な節句の一つである。重陽の風習について、高所に登って厄を払い、茱萸を身につけ、菊の花を観賞し、菊酒を嗜み、重陽糕を食するなどの習わしが、古くから文人墨客によって、好んで詠まれてきた。一方で、重陽節が設けられた本来の趣旨である「尊老敬老」については、かえって言及されることが少ないようである。

重陽節の意義、その中核となるのは、長寿を祈願することである。重陽節に用いられる茱萸や菊の花は秋の節句にふさわしいものでありながら、延年益寿の意味を併せ持っている。三国時代、魏の文帝曹丕はある年の重陽節に、友人である鍾繇に菊の花束を贈り、それに添えた書状にこう記している。「歳往き月来たり、忽ち復た九月九日なり。九を陽数として日月並び応ず、俗に其の名を嘉し、以て長久に宜しと為す。故に以て享宴高会す。……芳菊に至りては、紛然として独り栄ゆ……体を輔け年を延ぶること、斯より貴きは莫し。謹しんで一束を奉じて、以て彭祖の術を助く。」この曹丕の書状は、重陽節の寓意に言及した最古の文献の一つに数えられる。九は陽数にして、九月九日は長久という深意が込められているとし、また菊の花は「彭祖の長寿術」に資するものであると説いている。

「人生百に満たざるに、常に千歳の憂いを懐く。」人は誰しも長寿を望む。ゆえに中華民族はいにしえより長寿を祈り、年長者を敬う節句の行事を営んできた。『詩経』に「九月肅霜あり、十月場を漚う。朋酒を斯に饗し、曰に羔羊を殺す。彼の公堂に躋り、彼の兕觥を称ぐ。萬壽疆なし。」とある。この一節からも窺えるように、祝福と長寿祈願は秋の収穫祭の重要な目的である。

長寿を祈ることは必然的に年長者を敬うことに繋がる。それゆえ、古くから、秋の収穫の時期に年長者を慰め、敬い養う風習がある。『礼記』『月令』に云く「仲秋の月……衰老を養い、几杖を授け、糜粥飲食を行う。」古代の天子は仲秋の八月に、年長者に凭机と杖、また特別に煮込んだ麋鹿肉の粥を授けた。麋鹿の肉は滋養強壮の効果があり、気を補い体を健やかにする。じっくり粥に煮込むことで年長者の食用に適し、消化もしやすくなる。「仲秋に衰老を養う」、その目的は、年長者が健康で百歳まで長生きするという願いが込められており、秋嘗祭における幸福祈願・長寿祈願と、その趣旨を同じくする。

漢代の人々は「月令」を重んじた。それゆえ漢代の朝廷は「月令」のなかの仲秋に衰老を養う旨を国家の制度として推進した。『後漢書』『礼儀志』には「仲秋の月、県道皆戸を案じ、民の年はじめて七十なるものを比し、これに授くるに玉(王)杖を以てし、これに糜(麋)粥を饋す。八十九十は、礼、加賜あり。」とあるように、毎年仲秋の八月に、全国的に戸籍調査を実施し、七十歳を超えた年長者はみな朝廷の養老の恩典にあずかった。七十歳以上には杖と糜の粥が賜れ、八九十歳の年長者には更なる恩賞が下賜された。同書には、「王杖」の構造について具体的に記されている。「王杖は長さ九尺、端は鳩鳥を以

て飾と為す。鳩は噓せざるの鳥なり、老人の噓せざるを欲す。」王杖の上部先端に ^{キシバト}鳩の飾りがつけられている。年長者は歯が抜け、消化機能も衰えているため、食事の際にむせ

やすくなっている。^{キシバト}鳩はむせないといわれ、王杖に鳩の飾りを付けるのは、年長者がよく食べよく飲み、食事でむせないようにという願いが込められている。年長者にとろとろの糜粥を授けることと同じ趣旨である。1959年に甘肅省武威磨咀子の漢墓から出土した一本の鳩杖は、まさに漢代の敬老の風習を物語る現物の証拠である。鳩杖と同時に出土した十枚の漢簡の上に、天子による敬老の詔令が記されていた。七十歳以上の年長者には王杖を授け、その王杖には鳩を以て飾りとなす。鳩杖を所持する年長者は朝廷の符節を持つ官人と同等の待遇を受ける。官吏ならびに庶民が、鳩杖を持つ年長者に無礼を働けば、大逆不道の罪に問い、重き者は死刑にも至るという定めがある。

後漢の時代より、節句は各月の特定の日固定されるようになった。例えば、上巳の節を三月三日に、端午の節を五月五日に、七夕の節を七月七日に定め、敬老の節もまた九月九日に置いた。「九」は最大の数で、「九九」はまた「久久」と語呂が通じ、恒久・長寿の意味が込められている。敬老を旨とする節句をこの日に定めたのも、まさに理にかなっているといえよう。この敬老を趣旨とする節句もそれ以来、重陽・重九と名づけられた。

敬老の節は重陽・重九と名づけられ、日付も名称も定まった。ところが、歳月が経つにつれ、この節句の本来の趣旨は新しい名称によって次第に覆い隠されていった。後世の人々は重陽節を過ごすにあたり、もっぱら高所に登って遊覧し、菊を觀賞して酒を飲むことに熱中し、重陽節の「敬老」という本来の趣旨は置き去りにされてしまった。漢・魏以降、重陽節に高所に登って詩を賦することは文人墨客の間で風流の事となり、数多くの重陽の詩・詞・歌・賦のなかには、人口に膾炙する名作も少なからず存在する。一方、重陽節の敬老の習俗に触れたものは稀にしか見られない。明・清以降の各地の地方志においても、重陽節の風習に関する記載は、高きに登り、菊見、飲酒、重陽糕を食することにとどまっていた。2012年、全国人民代表大会常務委員会が『中華人民共和国高齡者權益保障法』を改正、通過させ、毎年の旧暦九月九日を「高齡者の日」と定めるに至って、ようやく制度の面から重陽節の古き文化の記憶を蘇らせた。中華民族は古来より年長者を尊び敬う美德を有している。現在、高齡化がますます進むわが国において、尊老敬老という伝統的な美德は一層貴重なものとなっている。重陽節に本来備わる尊老敬老という精神の真髓を真剣に掘り出し、発揚すべきである。